

# 大学院生向けの体育授業の導入と展開

松元 剛

体育科学系講師

開設科目はテニス、バドミントン、水泳、ソフトボール、つくばマラソン、バレーボール、バスケットボール。受講人数352名。これは平成13年度大学院生向けの体育授業として開設された科目名とオリエンテーション時の受講人数である。本学では平成12年度よりこの授業を開設し、そして今年度（平成14年度）で3年目を迎えようとしている。本来、専門教育の場である大学院、その対象者である大学院生に対して体育教育が導入されるようになった背景と現状について、簡単に触れてみることにする。

## 1. 導入までの経緯

平成11年3月に、大学改革担当副学長による「平成10年度大学改革委員会報告—具体的改革への提言—」が公表された。この提言には、本学が大学院を中心とする教育研究体制へ移行するための組織改革についての審議をしたことと、情

報環境のあり方を審議したことが述べられ、次いで本学の特色ある教育体制の充実のために、一つとして体育教育の充実を挙げたことが述べられている。すなわち、「体育教育及びスポーツ活動を、本学が持つ物的・人的資源を活用して、筑波大学の大きな特色とするために以下の提言をする」というものであった。

### 1 体育教育の拡充について

本学の大学院生数の増加、大学院生の体力の低下傾向を考えると、大学院生の体育教育の必要性が高まっているといえる。大学院生が履修しやすい時間帯に〈スポーツ実技〉〈身体運動の科学〉に関する授業を、大学院の科目として開設する（Academic Sports Program）。学類においては、自由科目「体育」の単位を卒業要件単位に認定していない5学群・学類に対する改善を求める。

2 スポーツ学習機会の増大について  
 学内のスポーツ活動の促進のために、  
 体育・スポーツ施設を段階的に整備・改  
 修し(Sports Facilities Improvement Scheme  
 構想)、スポーツ・体力づくり教室や公  
 開講座を一層充実させる。

### 3 課外活動のパフォーマンスの向上 について

スポーツ課外活動に対する応援、支  
 援体制を強化し、レベルの高いゲーム  
 を学内施設においても観戦できる機会  
 を増やす。

上記の提言を受けて、体育センターで  
 は、大学院生のバランスのとれたキャン  
 パス・ライフの形成を図る事を目的とし  
 て、スポーツ機会を提供するプログラ  
 ム、すなわち大学院生向けの体育授業を  
 平成12年度より開設することとなった。  
 開設にあたっては大学院生が履修しやす  
 い時間帯である火曜日・金曜日の4～5  
 時限に、スポーツ種目を主体とする科目  
 を設置した。表1に平成12年度における  
 開設科目と受講人数を示す。なお、開設  
 形態は学則第68条を受けて、学群の科目  
 として開設となる。

## 2. 平成12年度を受けて…

平成12年11月に、教育審議会会長等か

表1 平成12年度開設科目と受講者数

開設科目名	受講者数 (H12.5.16)
バスケットボール	76
バドミントン	75
ジョギング	29
水泳	80
テニス	131
バレーボール	50
合計	441

ら体育センター長への大学院体育に関す  
 る連絡として、「大学院課程における体  
 育教育に関する大学院としての対応につ  
 いて」の検討結果、および「大学院課程  
 における体育教育の導入について」の主  
 な意見・理由が提示された。それによ  
 ると、修士課程としての統一対応方法は  
 決定していないが、平成12年度と同様  
 に大学院生向けの体育の科目を学群で開  
 講されるシステムに準ずる形として、平  
 成13年度以降も試行的に継続されること  
 が要望された。なお研究科の開設科目と  
 しての開講を希望する研究科については、  
 実施する方向で関係組織と協議しながら  
 検討を進めるべきであるとも述べられて  
 いる。また博士課程委員会及び大研究科  
 においては、同研究科の開講科目とし  
 ては開設しないこととし、なお、学群に  
 おいて開講する体育の科目を受講でき  
 るというシステムに準ずる形で維持でき  
 るのであれば、本年度と同様に対応し  
 たいたいことであった。

したがって上記の内容を受けて、体育センターでは平成13年度の大学院体育に関しても、平成12年度と同じ開設形態で行うこととなり、冒頭で述べた開設科目および受講人数となったのである。(表2)

表2 平成13年度開設科目と受講者数

開設科目名	受講者数 (H13.4.10)
テニス	87
バドミントン	48
水泳	66
ソフトボール	41
つくばマラソン	33
バレーボール	42
バスケットボール	35
合計	352

### 3. 本当に大学院生の体力は低下傾向にあるのか??

平成11年3月の提言にあるように「大学院生の体力の低下傾向を考えると、大

学院生の体育教育の必要性が高まっている…。』としたことは本当なのだろうか?

筑波大学1年次生の男女別における12分間走の経年変化を報告<sup>2)</sup>したものとすると、この20年間で男子は約90m、女子で約220mの低い値となっており、持久力の低下が顕著であると述べられている。また図1は、男女別・卒業年度別に見た学年進行による12分間走の経年変化を表したものであるが、男女ともに4年間で約100m～150mもの減少が認められ、現在の筑波大学生の持久力は学年進行とともに相対的に低下していることは明らかである。また中谷ら<sup>3)</sup>は筑波大学大学院生の形態・体力測定値に関する報告において、大学院生の運動機会は少なく、運動不足であり、同年代の体力値の

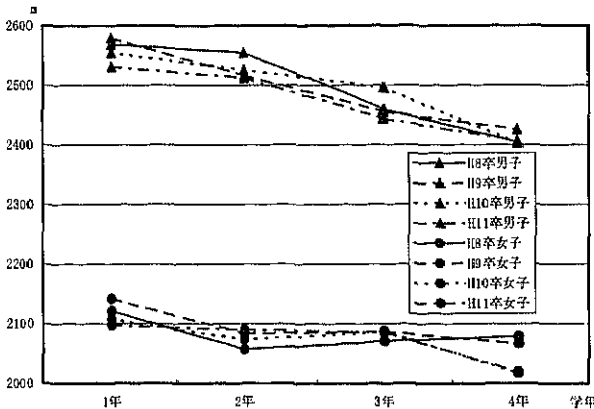


図1 卒業年度別学年進行による12分間走の経年変化

中でも劣っていることを指摘している。提言内容は真実と言わざるをえないのであり、大学院生に対する運動やスポーツを实践することへの動機付けを行うことは必要であろう。

#### 4. 「からだの教育」を通して大学院生に求められているものは？！

余談ではあるが私の専門競技はアメリカンフットボールであり、以前にロサンゼルス近郊で大学アメリカンフットボールの試合を観戦する機会があった。なんとそのスタジアムには10万人もの観客が詰め掛けていた。すさまじい光景である！まさに、観客と選手がインタラクティブな関係にありながら、アメリカンフットボールというスポーツを育て上げているということを感じることができた。たかがスポーツ、されどスポーツである。

国際的な競争力に耐えうるだけの優秀な研究者や高度職業人を輩出していくことが大学院に求められているだろうし、そのためにも大学院生が積極的にその資本となる自己のからだを健康・体力面で向上させておかなければならない。しかし時として彼らはスポーツ観戦者として、あるいはスポーツ指導者として、そのリーダー的資質が社会的に問われるの

ではなかろうか。すなわち、スポーツ文化の創造・継承という点において、教養としてのスポーツ・サイエンス（健康科学、運動学、人文社会学）を身につけ、スポーツ活動を通じた社会的貢献を担えるだけの人材を育てることも大学院生向けの「からだの教育」ではなかろうか。

- 1) 中谷敏昭, 他: 筑波大学大学院生の運動能力に関する一考察—一般事務職員との比較—, 大学体育研究, 13: 43-55, 1991
- 2) 松元 剛: 大学生の体力の年次推移—筑波大学—, 体育の科学, 52: 48-51, 2002.

(まつもとつよし コーチング学専攻)